上海ミステリーツアー2025

2025 年 5 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

5 月末、海外旅行では初めてのミステリーツアーに妻と 2 人で参加してきた。ミステリーツアーなので行先も国名も知らされておらず、成田空港で航空券をもらって初めて上海だとわかった 2 泊 3 日の旅を紹介する。

序章　旅の始まり

■ミステリーツアー

私は今までミステリーツアーに何回か参加している。しかしいずれも国内旅行で、今回のような海外旅行は初めてになる。というよりも業界でも初めての試みと言っていいだろう。

ミステリーツアーとは、行先を知らされずに現地に行って驚き感動するものだが、バスツアーと違って飛行機を使うと最初に行先が分かってしまい驚きも少ない。それ以外にも海外旅行特有の現地通貨、VISA（査証）、Wi-Fi ルータなどといった事前に準備するものある。

しかしそういった課題があるにも関わらず、阪急交通社がアジア限定としながらも海外ミステリーツアーを募集すると知って、その意欲的な姿勢に共感して妻と共に参加の申し込みをした。

■朝早い集合

出発の一週間前に届いた行程表には、6 時 45 分に成田空港集合と書かれており、この時間の集合は神奈川県に住む私たちにとってはさすがに厳しい。

電車やバスでは間に合わない。空港周辺の民間駐車場に聞くと「5 時に来て下さい」と言われ、無理ではないが辛い。そこで私は成田空港が運営する空港内駐車場を利用した。

集合場所に着いて航空券を受け取り、初めて行き先が中国の上海だと知る。上海ならば約 3 時間で行けて、現在 VISA は不要になっている。現地通貨“元”は現地に行ってからバスの中で両替できますと言われ、Wi-Fi ルータは成田空港内で当日借りられる店を紹介してもらう。

実は私はラッキーと思った。その理由は、中国は 31 年前に行っただけで、その後の中国の発展からすれば違う国になっているといってもいいからだ。

第一章　１日目

■賑わいの街

上海浦東国際空港に到着する。空港には美人の現地ガイドの李さんが出迎えに来ていて、ツアー客 17 人と添乗員を乗せたチャーターバスが出発する。

ミステリーツアーなので行先を知らされておらず、上海市内でも比較的郊外にある老街（中国の古い街並み）にやって来る。その場所は「新場古鎮」だと教えてもらう。

川があって、川沿いに昔の家並みが続いている。ガイドの李さんは「ここは映画やテレビの撮影によく使われますよ」と言っている。

【新場古鎮の川沿いの家並み】

確かに川沿いの家並みはとてもいい感じだ。

しかし川から離れると様相がだいぶ異なる。李さんの後に続いて狭い路地を歩いて行くと、路地には小さな食堂や露天商が並んでおり、多くの人々が行き来して人で溢れている。それなのにバイクがクラクションを鳴らしながら人混みをかき分けて走って来るのだから凄まじい。

李さんは「今日はお祭りだから、人が多いよ」とさらりと言っている。

店で売っているものは、果物、野菜、チマキ、饅頭、鰻、スッポン、豚肉、鶏肉など、食べ物が多い。

大きな油揚げのようなものがある。李さんに「これは何ですか？」と聞くと、彼女は「豚の皮を揚げたものよ」と教えてくれる。私はそれを初めて目にするが、中国ならばさもあらんと思いながらもこれから始まる旅に何故かワクワクし始める。

【新場古鎮の路地】

【豚の皮を揚げたもの】

■最初の昼食

その路地にある小さな食堂に案内されて昼食になる。行程表にはB級グルメの○○○○の昼食と書かれている。李さんは「この店のワンタンが名物で、美味しいよ」と言っている。

ワンタンは確かにいい味を出しているが、実はあまり腹が減っていない。

その理由は、一週間前に届いた行程表には機内食の記載がなかったから、私と妻は成田空港に着く前に朝食を食べてきた。そうしたら機内食が出てきて、それも食べたから腹が減っていない。

機内食の記載がないのもミステリーだが、腹が減ってないのに完食するのだから、自分の意地汚さに呆れてしまう。

【ワンタン】

■新天地はお洒落な街

バスは上海の中心街に入って来る。そして「新天地」というお洒落な街並みの散策になる。

李さんの説明では、ここはヨーロッパ人が作った古い街で、近年になって再開発され、新しいビルが続々建てられて上海有数の繁華街になったので新天地と呼ばれているという。

確かに新旧の建築が共存している街並みは、ノスタルジックでモダンな感じがする。

ノスタルジックといえば市内にはトロリーバスが走っている。もはや日本では1台も走っていないが、上海に来て多く見かける。トロリーバスは架線から電気の供給を受けて走るので、よく考えると先進の環境配慮バスと言ってもいいだろう。

バスは綺麗で新しい。停車中は架線からの給電を受けていないので電池を積んだEV（電気自動車）バスなのだろう。

トロリーバスに乗り、しばらく車窓観光を楽しむ。そして降りると私たちが乗って来たバスが待っているからこれもミステリーだ。おそらく後に付いてきたか、待ち合わせの時間と場所を決めていたのだろうが、いずれにしてもこんなことは個人旅行ではできない。

【トロリーバスの車内と外観　架線から給電を受けていないが行先の表示が出ている】

■中国の自動車事情

バスに戻ると李さんが興味深いことを言っている。

中国の自家用車のナンバープレートは緑色と青色があって、緑色は EV（電気自動車）、青色はガソリン車（ハイブリッド車含む）で、緑色のナンバープレートは無料だが、青色は約 200 万円するという。つまりガソリン車に乗るには約 200 万円を余分に払わないといけない。

これでは日本メーカのハイブリッド車は売れず、EV を主力とする中国メーカの車が売れるはずだ。これはトランプ政権の関税と同じで、中国政府の絶対的権力と自国優先主義を痛感する。

対して日本の場合はその逆で、ガソリン車をそのままにして EV に補助金を出している。財政赤字が 1100 兆円を超えている日本なのに補助金を出すばかりでいいのだろうかと疑問を持つ。

■拌麺

夕食は高級レストランに案内される。李さんは「夕食は拌麺（ばんめん）です」と言っている。

行程表には「高級海鮮食材を利用した○○○○をご賞味下さい」と書かれており、この 4 文字には“ばんめん”が入るらしい。李さんは「麺に蟹味噌の餡をかけて、混ぜて食べて下さい」と言っている。どうやら高級海鮮食材とは蟹のことで、拌麺とは混ぜ麺のことらしい。

出てきた拌麺は餡と麺が別々の器に入っていて、見た目は麺とソースが別々のパスタといったところだろう。餡は蟹味噌と蟹肉をふんだんに使っており濃厚で、麺と混ぜるとちょうどいい味になる。茹でた麺なので食感はまさしくパスタで、こんな味のパスタもありそうだ。

【拌麺　餡と麺が別々の器に入っている】

■豫園（よえん）

夕食を終えると既に暗くなっている。李さんは「次は豫園（よえん）ですよ、5 円じゃありません」と訳の分からないことを言っている。

薄暗い路地を李さんに続いて歩いて行き、路地を抜けると想像を絶する光景が広がっている。

豪華絢爛な中華風の大きな建物が見事にライトアップされている。建物は一つやふたつではなく、いくつもの建物が連なっている。

アニメ映画「千と千尋の神隠し」の油屋のモデルになったと言われている群馬県の四万温泉の積善館に似ているが、それを数倍も豪華にしたような建物がたくさんある。もはやこの世のものと思えない建物群が目の前に存在している。

【豫園の建物群】

李さんの説明では、豫園の始まりは 16 世紀の明の時代に遡るという。

当時のある役人が「都会の喧騒から離れ、両親がゆっくりと過ごせる場所を作りたい」という想いで建設したのが始まりで、その後は戦争などで廃墟になったが、修復されて上海屈指の観光名所で蘇った。

蘇ったのは中国政府の方針で、この地区の全ての建物に電飾を点けてライトアップしろという命令が下ったというから、日本では到底考えられない。

16 世紀と言えば日本は戦国時代で、豊臣秀吉が明（中国）を侵略しようとして朝鮮半島に兵を出して逆にやられて断念した頃で、そんな時代に豫園が造られていた。

■上海タワーで圧倒される

上海タワーに案内される。これはオプショナルツアーなので、参加するか否かを決めるために行先や内容を事前に知らされていた。そしてほとんどのツアー客はオプショナルツアーに申し込んだ。

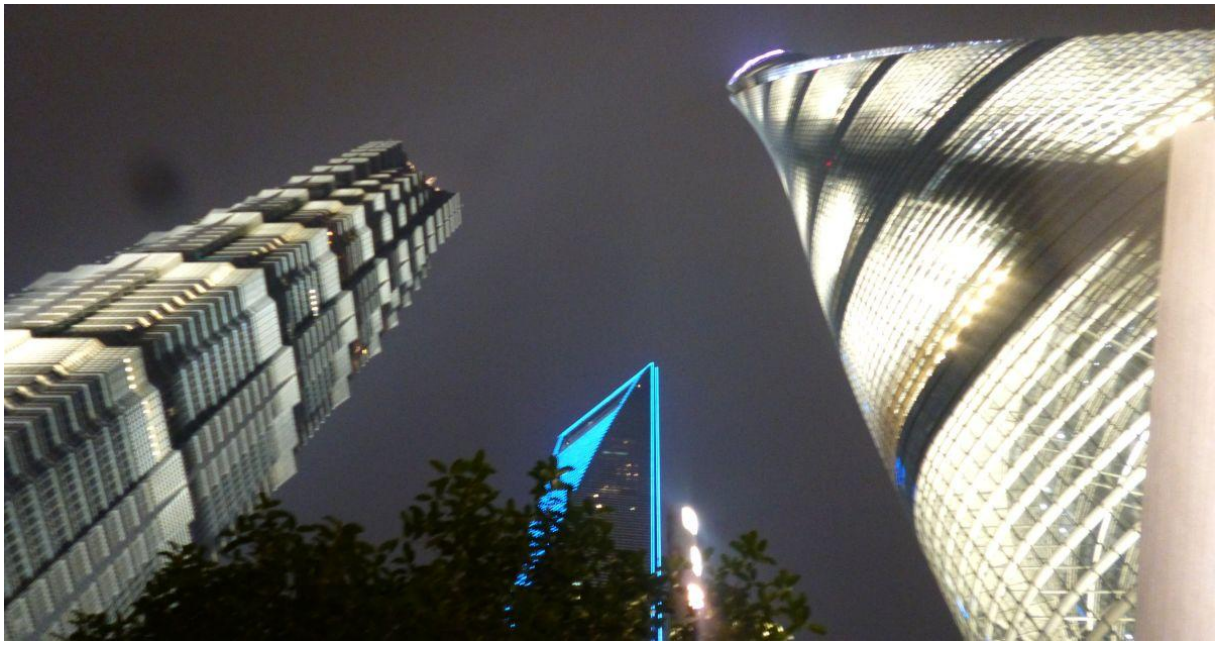
上海には 400m 以上の超高層ビルが 3 つあって、隣り合って建っている。世界的には超高層ビルは単独で建っていることが多いので、隣接して建っているのは極めて珍しい。

3 つのビルは、完成した時にはどれも中国第一位の高さだった。

1999 年に 421m のジンマオタワーが完成し、2008 年に 492m の上海ワールド・フィナンシャル・センターが完成した。そして 2015 年に 632m の上海タワーが完成し、現在も中国第一位になっている。

これら全てが 30 年以内のことなので、31 年前に私が中国を訪れた以降のことになる。

李さんは「地元の人たちはジンマオタワーを“注射器”、上海ワールド・フィナンシャル・センターを“線抜き”、上海タワーを“泡だて器”と呼んでいます」と言っている。確かにそんな風に見える。



【上海の 400m 超の 3 つのビル　左から注射器、線抜き、泡だて器】

私たちは現在中国で一番高い、泡だて器と呼ばれる上海タワーにやってくる。

下から見上げると完全にねじれており、その理由は風の力を逃がすためだという。600m を超える高さになると、そんなことも考慮して設計することに元エンジニアの私は感激してしまう。そういえば東京スカイツリーもなんとなくねじれているように見える。

エレベータに乗ると 55 秒で最上階の 128 階まで到達する。秒速 18m というから相当速い。
オリンピック選手でも 100m を 10 秒、つまり秒速 10m だから、その 1.8 倍のスピードで垂直に登るのだからとてつもなく速い。

現在日本で一番高いビルは麻布台ヒルズ森 JP タワーで、それは 325m しかない。東京スカイツリーは 634m だが、電波塔なのでビルではない。一般観光客が登る展望台は 350m と 450m にあるが、登るスピードは秒速 10m で、高さも速さも完全に後塵を拝している。

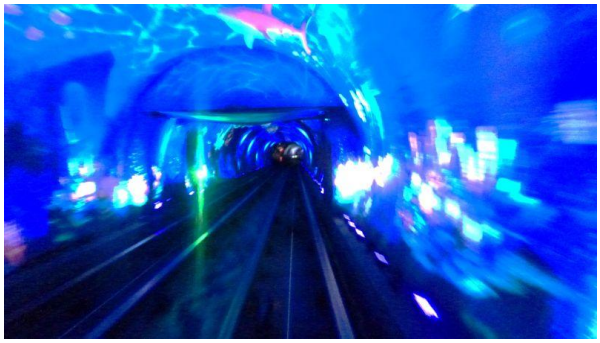
上海タワーの展望階から見る夜景は実に素晴らしい。上海の街が一望でき、上海のシンボルともいえる 468m の「上海テレビ塔」を中心に素晴らしい眺めが広がっている。
すぐ近くの 421m の注射器、492m の線抜きを上から眺める。このような光景は超高層ビルが隣り合って建っている上海でしか見ることができない。

【上海の夜景　中央が 468m の上海テレビ塔】

■観光トンネル
次の観光トンネルもオプショナルツアーで、上海タワーとセットになっている。
上海は黄浦江（こうほこう）という川の両岸にあって、李さんはこの川を揚子江と勘違いする日本人が多いと言っている。
黄浦江は上海の中心部を流れて、すぐに揚子江と合流して東シナ海に注いでいる。黄浦江の川幅は約 500m だが、揚子江の河口付近の川幅は約 40km もあり、桁違いのスケールと言っていいだろう。

川の下にトンネルが掘られており、川を渡ることができる。私は川幅 500m と聞いて、歩いて渡ると思っていたが、トンネル内にはレールが敷いてあってゴンドラが私たちを運んでくれる。
トンネルの中は様々な工夫がしてあり、光と音のナイトショーとでもいうような演出がされている。

【観光トンネルのゴンドラ】



【観光トンネルの内部】

■リッツカールトンに泊まる

ミステリーツアーなので、ホテルも知らされていない。パンフレットには「憧れの世界的有名なブランドホテルに 2 連泊、最上級スーパーデラックスホテル」と書かれており、豪華な朝食の写真が並べられていた。

バスがホテルに着いて、初めてリッツカールトンだと分かる。

リッツカールトンは東京にもあるが、最低でも 1 人 1 泊 7 万円する。このツアーの代金は 10 万円なので、これもミステリーだ。

【パンフレットのホテルの朝食】

第二章　二日目

■中国事情

2 日目、ホテルで超豪華な朝食を食べて出発する。昨日に続いて朝から満腹になってしまい、このツアーは私の胃袋にとっても未知の領域に突入していく気がする。

目的地に向かうバスの中で、李さんが上海や中国のことを話してくれる。

中国の国土はニワトリの形をしており、26 の省に分かれている。省の下は市、その下が県、そして陳、村になる。県と市は日本と逆の関係になっている。

上海は直轄市で省に属しておらず、人口約 3000 万人で東京・神奈川・千葉・埼玉に匹敵する。

物価は生活必需品や公共交通機関は安い。昨日のトロリーバスは 2 元（約 40 円）、青島ビールのレギュラー缶は 4 元（約 80 円）で、その他の食料品も日本の半分以下で買える。

しかしながら私が 31 年前に訪れた時は、物価は日本の 1/10 くらいだった記憶がある。30 年で約 5 倍になったことになるが、国民の所得も 5 倍になっているのだろうか。

■蘇州は運河の街

バスは上海を抜けて蘇州に入る。蘇州市は江蘇省で、蘇州市だけで約 1300 万人もいるのだから、とんでもない。

さらにとんでもないことを李さんが言っている。北京から杭州まで 1800km の「京杭大運河」で結ばれており、それは紀元前 5 世紀から掘りはじめて 7 世紀に完成した。その後も支流が掘られ、13 世紀には 2000km 以上になったとのことだ。

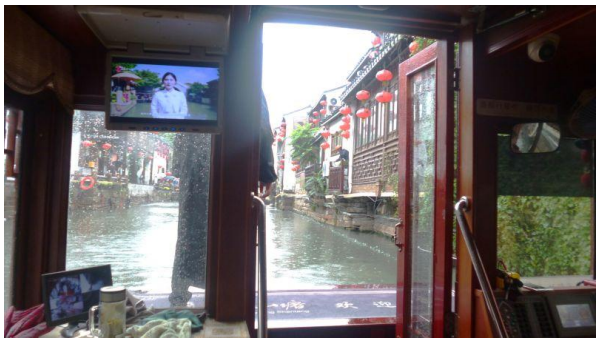
紀元前 5 世紀といえば日本は縄文時代で、1800km は青森から下関までの距離に相当する。

京杭大運河は蘇州を通っていて、バスはその支流にある「七里山塘街」という街にやって来る。

そして遊覧船に乗り、運河を体験する。両岸には古い家が建ち並び、今でも運河を生活道路として使って人々が暮らしている。

【七里山塘街の運河】

行程表には「東洋の○○○」と書かれている。東洋のベニスが正解らしいが、私は違和感を覚える。確かに運河を生活に使っている点ではイタリアのベニスと同じだが、約 2000km というスケールは圧倒的で、ベニスの比ではない。



【遊覧船から見た運河】

【生活に使っている運河の出口付近】

■世界遺産

七里山塘街は世界遺産になっている。実はミステリーツアーの行程表にも世界遺産と書かれていたので、私は行先が台湾ではないことがすぐに分かった。

その理由は、台湾は 1971 年に国連を脱退したので国連機関のユネスコの世界遺産条約には入っていない。そのため台湾には世界遺産が一つもないからだ。

ちなみに国内のミステリーツアーでも世界遺産と書かれていると、ほぼ行き先が分かる。

■盤門

蘇州の旧市街は、運河に囲まれた城塞都市だった。旧市街は 3.3km×4.6km の運河に囲まれており、運河の内側にも高い城壁があるから侵入者は簡単に入ってこられない。

内部に入るには、盤門という砦のような門をくぐらないといけない。盤門は水門と陸門の二重の門になっており、門の前は狭く曲がりくねっていて、侵入する敵を上から攻撃できる。

このあたりの構造は日本の城に似ている。いや、おそらく日本がこれを参考にしたのだろう。

【盤門と運河】

盤門は春秋時代に築かれたが、現存する盤門は元の時代に建て替えられたという。

春秋時代とは日本は縄文時代で、そして元の時代は元寇の頃なので鎌倉時代になる。どちらにしても相当古いが、その差が 1800 年もあるのだから時間的なスケールにも圧倒される。

■信じない店主

昼食は運河の近くの料理店で食べる。高級魚の“桂魚”を揚げて甘酢餡かけをかけた料理をメインに各種中華料理、炒飯、スープなどが食べきれない程たくさん出てくる。これもまた私の胃袋にとっては未知の領域だ。

その食事の最中に店主がやってきて、紹興酒を差し入れてくれる。

【揚げた桂魚】

そして店主は流暢な日本語で「これからどこへ行くの？」と聞いてくる。
ツアー客の誰かが「ミステリーツアーだから行先は知らないのよ」と答える。すると店主は「ミステリーツアー、何それは？」と聞き返すと、別のツアー客が「行先を何も知らされていないツアーですよ」と答える。
店主は驚きを隠しきれない様子で、「日本を出る時には、上海に来ることは知っていたのでしょう？」と質問を変えてくる。するとまた別のツアー客が「それも成田空港で知っただけですよ」と答える。
店主は「そんなツアーがあるの！？」と最後まで信じていないようだった。

■虎丘斜塔（こきゅうしゃとう）
店を出て、どこに行くか聞かされないまま、高い塔が見える場所にやって来る。
李さんは「あれが東洋のピサの斜塔と呼ばれる“虎丘斜塔”です」と教えてくれる。その斜塔は丘の上にあり、七層の八角形で高さは約 48m、斜塔なので 15 度傾いているという。

イタリアのピサの斜塔は高さ約 56m、最大 5.5 度傾いていたが、近年の工事で現在は約 4 度になった。虎丘斜塔は、高さではピサの斜塔に約 8m 負けているが、角度は 3 倍以上で圧倒的に勝っている。
まあ、勝ち負けの問題ではないか。

それにしても、また“東洋の”ピサの斜塔か。これだけのものがあっても、東洋を入れないといけないとは・・・、何となく面白くないと感じるのは私だけだろうか。

【虎丘斜塔】

■夕食は渡り蟹
上海に戻ってきて、夕食は高級料理店の「珍寶海鮮（JUMBO Seafood）」という店でワタリ蟹の海鮮料理を食べる。

行程表では店名が○○○○、料理は○○○蟹の海鮮料理となっていた。店名はともかくも、蟹は有名な上海蟹ではないのだから隠す必要もないだろう。

上海なのに上海蟹が出てこない理由は、上海蟹は秋から冬が旬で、今は春なのでワタリ蟹になったのかもしれない。

それでもワタリ蟹も充分に美味しい。それ以外の中華料理もたくさん出てくる。いよいよ体重も未知の領域か。

【珍寶海鮮のワタリ蟹料理】

■上海雑技団

上海雑技団の公演にやって来る。これもオプショナルツアーになっている。

実は私は 31 年前にも上海雑技団の公演を観たことがある。今回もその時のイメージでやって来たが、会場に入って圧倒される。

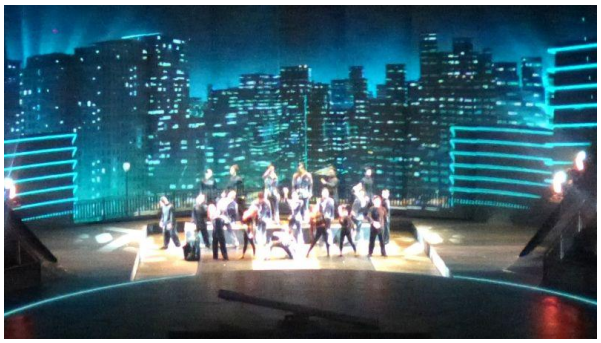
円形のステージを囲むようにすり鉢状の観客席があって、会場全体がドームに覆われている。照明設備も整っていてプロジェクションマッピングが使われている。

【円形のステージとすり鉢状の観客席】

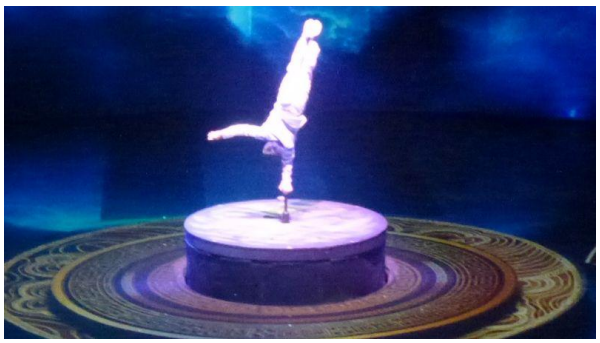
公演が始まると映像と音響に圧倒される。映像はプロジェクションマッピングなのでステージの床や背後のスクリーンに様々な風景を映し出して、居ながらにして時空を超えた景色を楽しむことができる。さらに映像は静止画ではなく動画だから単なる舞台装置を超えている。音響も凄い迫力でドーム全体に響き渡り、床から振動が体に伝わってくる。

もちろん演技も素晴らしい。美しさと力強さがある。

ミュージカルを見ているような息の合った踊りもあれば、とても人間技とは思えない演技も見せてくれる。雑技団の真骨頂は力技とバランス感覚だと思うが、オリンピックレベルの体操とサーカス、それに芸術性を加えたとでもいうのだろうか、とにかく凄い。



【ミュージカルのような踊り】



【人間技と思えない演技】

様々な道具も使われている。ポール、シーソー、ローラースケート、自転車も登場する。

驚いたのはオートバイだ。ステージ中央に直径 10m くらいの金網の球体が出てきて、その中をオートバイが縦横無尽に走り回る。そして徐々にオートバイの台数が増えて、最後は 7 台になって、4 台が横回り 3 台が縦回りで隊列を組んで走っている。それでもぶつからないから凄い。

これには度肝を抜かれる。隣で見ていた妻も周囲の人もみな拍手喝采で、「信じられない！」の連発だ。

【7 台のオートバイが中で走っている球体】

31 年前の上海雑技団を完全に超えており、明らかに異次元のものに進化している。古くからの曲芸の精神を活かしながら、積極的に新しいものを取り入れている。

そういえば上海の街も、古い建物が残っているものの新しく斬新なものも多く建築されており、伝統と革新の融合とでもいうのだろうか。

■ホテルに連泊

ホテルは連泊になる。昨日のチェックイン時にウエルカムドリンクのチケットをもらっており、帰るまでにホテルのバーで１杯飲むことができる。

一般的にウエルカムドリンクはチェックインの日しか飲めないが、ここはバーが開いている時なら滞在中いつでも飲める。さすがにリッツカールトンだと感心してしまう。

上海雑技団の興奮冷めやらぬうち、ウエルカムドリンクを飲むために妻とバーに入る。

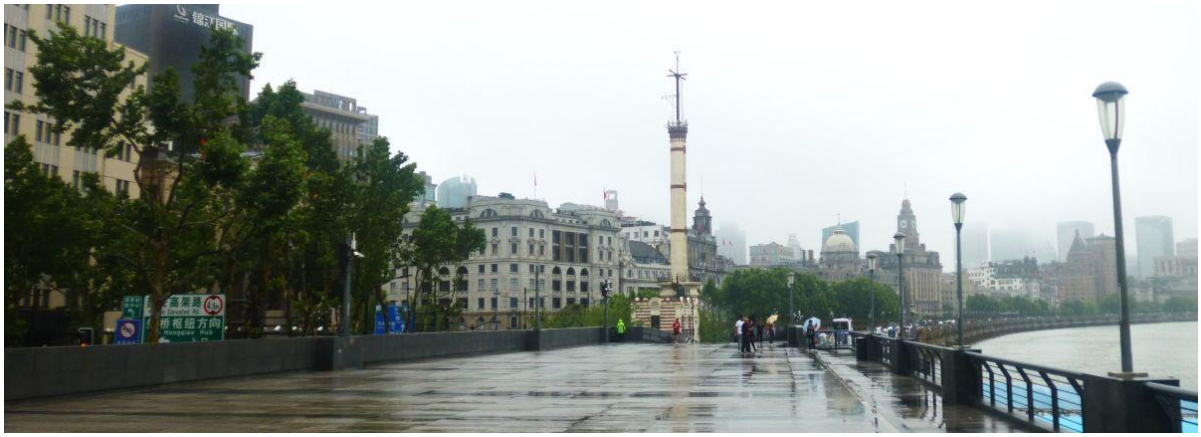
すると同じツアーの夫婦がいるので同席をさせてもらう。当然のように上海雑技団の話になり、今回のツアーの中でナンバーワンだと言っている。

そして話は今まで行った旅行先の話になり、夫婦はいろいろな場所に行っている。やはり海外ミステリーツアーに参加するような人たちは旅の強者（つわもの）ばかりだ。

第三章　三日目

■外灘（ワイタン／Bund）

最終日、連れて来られた場所は黄浦江の川岸の観光スポット「外灘（ワイタン）」で、英語ではBund と呼ばれている。



【外灘（ワイタン／Bund）】

今、私たちは川の西岸にいる。西岸は旧市街で、“租界時代”のヨーロッパ風の重厚な建物が多い。対岸の東岸は、あの３つの超高層ビルなど新しいビルが林立している。

租界時代という知らない言葉が出てきたので調べてみた。

租界とは上海の外国人居留地のことをいう。その経緯は、アヘン戦争で負けた中国がイギリスと 1842 年に結んだ不平等条約（南京条約）によって上海を開港させられ、外国人の居住を認めさせられたことに由来する。いわば治外法権の状態で租界は 100 年近く続いた。しかしそのために上海が最も西洋的で先進の都市になった。

租界は当初は欧米列強だけだったが、やがて日本も加わるのだから、何とも申し訳ない気持ちになる。それでも李さんは重厚な建物が残っていることを歓迎してくれている。

私たちは初日に豫園を見た後にバスで黄浦江の自動車用トンネルを抜けて上海タワーに登り、観光トンネルで戻ってきた。そして今は租界にいて、これから船で黄浦江を渡るという。つまり黄浦江を 3 通りの方法で渡ることになる。

そう考えるとこの川が上海の観光の中心にあって、過去と現代を隔てていると言ってもいいのかもしれない。

残念ながら本日は小雨と霧で、468m の上海テレビ塔の下の方がかすかに見える程度だ。上海テレビ塔には 3 つの展望台があるが、一番上の展望台はもちろん見えない、263m の真ん中の展望台も全く見えないはから、多分 200m より上は霧の中ということになる。

そうなると、400m 超の 3 つの超高層ビルはどこに建っているのか、土地勘のない私たちにはその場所さえも検討がつかない。

【一昨晩の上海テレビ塔】【本日、外灘から見た上海の高層ビル群　赤い矢印が上海テレビ塔】

船に乗っても霧であまり景色が見えない。

李さんは「上海は揚子江の南にあって、運河や川や湖が多いので、湿気があっていつも霧に覆われています。だからこの霧が上海らしさだと思って楽しんで下さい」と、これも前向きな発言をしている。

■昭和レトロのテーマパーク

再び西岸の古い街並みに戻り、北外灘来福士にある 1990 年代の中国の暮らしを再現したというテーマパークにやって来る。1990 年代とは私が前回中国を訪れた頃だ。

しかしテーマパーク内をぱっと見た感じでは日本でいう昭和レトロで、私の幼い頃つまり 1960 年代とよく似ている。ということはその頃は日本が中国よりも 30 年くらい進んでいたということになる。

【北外灘来福士にある 1990 年代の中国の暮らしを再現したというテーマパーク】

日本と中国の関係は、このわずかな期間だけ日本が進んでいただけで、ほとんどは中国が先をいっていた。

日本の縄文時代は中国では 1800km の運河を掘って盤門を造っていた。奈良時代は唐（中国）の文化を学ぶため日本から遣唐使を送っていた。鎌倉時代の元寇では元（中国）の侵略を奇跡的に防いだ。戦国時代は豊臣秀吉が朝鮮半島に兵を出すが明（中国）に追い払われた。

明治時代になって初めて立場が逆転し、日清戦争で日本が勝利して租界にも進出した。昭和時代になって日本は中国を侵略したが、第二次世界大戦で全て無くなった。その後の高度成長期で日本は世界第 2 位の経済力を手にした。

そして現在は中国の GDP は世界第 2 位、日本は世界第 5 位になっている。

■3 日目の昼食

テーマパークの中には多くの食堂がある。行程表には 1932 年創業の名店「○○○」で、B 級グルメの焼き○○○の昼食を食べると書かれている。

名店とは「大壺春」で、B 級グルメは“焼き小籠包”だと、李さんから教えてもらう。

焼き小籠包を食べてみるとそれなりに美味いが、焼いたために小籠包特有のあの肉汁が無くなっているのが残念だ。

ただしパンフレットには「カリッ、ジュワァ～」の絶品食感と書かれている。おそらく食べたことのない人が小籠包のイメージだけでパンフレットを作ったのだろう。

【パンフレットの 3 日目昼食の部分】

【実際に食べた焼き小籠包】

■ショッピング

本日は最終日で、夕方の飛行機に乗らないといけないので空港に向かう。その途中でラテックスというゴム製品の工場があって立ち寄る。

工場の責任者が軽妙な日本語で製品の優秀さを説明し、枕やマットレスに実際に寝る体験をしてからショッピングの時間になる。

実はこの店だけでなく、今回のミステリーツアーでは体験型のショッピングがあって、初日はお茶、2 日目はシルクだった。

お茶もシルクも、私は日本のものだというイメージがあったが、どちらも中国が本場で歴史もスケールも圧倒的だった。

これも昼食の焼き小籠包と同じで、イメージだけでは駄目で、実体験の重要性を痛感する。

そして本日のゴムの寝具も素晴らしい。あまりに寝心地がいいから思わず寝具一式を買ってしまった。

■リニアモーターカー

工場を出て空港に向かう途中で、私たちの目の前を“ある乗り物”が猛スピードで通過していった。ツアー客たちは「今のは、何なの？」と驚きながら言っている。

李さんは「リニアモーターカーですよ」と言い、さらに「上海の中心から空港までの約 30km を結んでいて、時速 430km で運行しています」と説明してくれる。

私が「いつから？」と聞くと、李さんは「20 年前から」と当たり前のように答える。

私は山梨県にあるリニアモーターカーの実験線で時速 500km の走行を見たことがあり、目にも留まらぬスピードだった。しかしそれはあくまでも実験線だ。

確かに日本のリニアモーターカーは超電導技術を使っているから技術的には上だが、時速 430km でも 20 年前から走っている現実を見せつけられて驚くばかりだ。

日本はおよそ 60 年前からリニアモーターカーを研究開発しており、2027 年の開業予定だった。しかし静岡県の反対で、現在はその目途も立っていない。

中国では中央政府の決定は絶対で、地方自治体や民間企業は反対できない。

民意が反映されないという点では必ずしも良いとは言えないが、開発や実用化は圧倒的に速い。

■早い搭乗

空港に到着し、出国手続きなどを済ませて搭乗口に着いたのは出発の 1 時間前で、だいぶ余裕があった。そして 50 分前には搭乗が始まり、30 分前に最終案内というアナウンスが流れた。

私は「何でこんなに早いの？」と添乗員に聞くと、添乗員は「出発遅れは高いペナルティ料金を払わなくてならないので、航空会社はとても気にしています。だから航空券にも『20 分前に搭乗口のゲートを閉めます』と書かれています」と言っている。

航空券を見ると小さい文字だが確かに書かれている。それを見て私と妻は慌てて搭乗する。座席に座ると定刻の 18 分前にドアが閉められ、8 分前に飛行機が動き始める。
日本の航空会社のように係員が乗客を探しに来てくれないようだ。ここでもまたスピード感ある中国を感じた。

成田空港には夜の 8 時過ぎに到着し、そして空港内の駐車場に置いてあった愛車に乗って帰宅した。空港内の駐車場がこれほど楽だと改めて感じた。

終章　旅のおわりに

■留守宅にて
私たちが旅行に出発したその日に、旅行会社から日時指定で自宅に書類が届いた。中身は今回のミステリーツアーの行程表で、場所や内容が全て記載されており、“〇〇〇”などがないものだ。
留守番の家族に、今どこを旅行中なのか、どのホテルに泊まっているのかを知らせるために送ってきたのだろう。

ただ我が家では開封せずに置かれていた。留守番をしていた家族は「宛先が植木圭二になっていたから開けなかったよ。でも留守番のいない家は誰が見るのかな」と言っていた。
確かに、これは気の利いたサービスではあるが、事前にそのような書類が届くことを伝えておく必要があるだろう。これも初めての海外版ミステリーツアーだからわかったことで、挑戦したがために出てきた課題だ。
何事も挑戦することで進歩していく。いい勉強になった。

■海外ミステリーツアーについて
私は海外旅行においては、同じ国に行かないようにしている。その理由は世界の異なる国々を巡ることを優先しているからだ。
しかしながら広い中国を 1 国として、小さな国も 1 国としているのはかなり無理がある。そんな中、ミステリーツアーはどこに行くか分からないということが参加するきかっけになった。

日本国内のミステリーツアーでも、パンフレットの写真を見て、これは知らない場所だということで決めている。今回も見たことがない景色だったから、それが参加の決め手になった。

■期待と落胆、偶然と感動
私は個人旅行で行く場合は下調べをして行くが、今回のようなミステリーツアー、あるいは普通のパックツアーもあまり下調べをしないようにしている。

事前に調べて期待して現地に行くと、それを裏切る結果になることが多々あるからで、私はそれを「期待と落胆」と呼んでいる。

逆に現地に行って予想や期待を超えた時に感動が生まれる。そして偶然に遭遇したものほど大きな感動になる。私はそれを「偶然と感動」と呼んでいる。

ミステリーツアーは、行先を知らないから「偶然と感動」が多くなる。そして今回は 31 年ぶりの中国なので、新鮮なことばかりで感動が多かった。

■旅の記録

実施は 2025 年 5 月 31 日（土）～6 月 2 日（月）の 2 泊 3 日で、その行程を示す。尚、本文の行程と一部異なっているが、こちらが実際の行程になる。

・1 日目　朝 4 時に自宅を出て車で成田空港へ、途中朝食を食べ、空港駐車場に停めて、
6 時 45 分空港集合、8 時 55 分発の飛行機で上海浦東国際空港へ、
11 時（以降は現地時間）空港に到着、バスで「新場古鎮」へ、
食堂「林枝豆」でワンタンの昼食、「新天地」散策、路線バス（トロリーバス）乗車、
新天地のお茶と民芸品の店で試飲とショッピング、
夕食は「MaxXX by Steigenberger」　下のレストランで拌麺（ばんめん）、
その後「豫園（よえん）」散策、「上海タワー」登り夜景見物、観光トンネル入場、
「The Portman Ritz-Carlton（ザ・ポートマン・リッツカールトン）」チェックイン

・2 日目　9 時にホテル出発、蘇州「七里山塘街」を散策、京杭運河の支流で遊覧船に乗り、
下船して「虎丘斜塔」を遠くから見て、シルク店見学とショッピング、
昼食は「蒌門家宴」で桂魚の餡かけ料理など、「盤門」と「呉門橋」見物、
上海に戻り「珍寶海鮮」でワタリガニなどの海鮮料理の夕食、
「上海雑技団」の公演観劇、ホテルに連泊

・3 日目　9 時にホテル出発、「黄浦江の外灘」を見物、船で対岸に渡ってバスで西岸に戻り、
北外灘来福士の城市集市の「大壺春」で焼き小籠包の昼食
ラテックス店でゴムの枕やマットレス体験とショッピング、
16 時 20 分上海浦東国際空港発の飛行機で 20 時 10 分帰国、車で帰宅

費用総額は夫婦 2 人で約 315000 円になった。詳細を以下に示す。尚、1 人分と明記していない金額は 2 人分を表示している。

ツアー代金	256875 円（1 人分の基本費用 100000 円、サーチャージ 22000 円他）
OP ツアー代金	32000 円（上海タワーと観光トンネル、上海雑技団　各 8000 円/人）
現地通貨両替	10000 円（飲み物代や土産など、寝具一式は入っていない）
駐車場代	5600 円（成田空港内駐車場）
国内交通費	約 10000 円（成田空港までの高速道路往復とガソリン代）